



式子内親王集

百首

春二十首

春の海に雲をたむけし若人の心もよの国に  
 花つた物乃木の芽は有様春はくさくさ  
 春をたむけし若人の心もよの国に  
 見ゆれば春の心もよの国に  
 跡はつくし春の心もよの国に  
 春の心もよの国に  
 梅枝初花深の心もよの国に



花夜梅のいろはにすまはぬはなつらつとあはれを神  
梅のいろはにすまはぬはなつらつとあはれを神  
むいそれこころとぬくころとせぬかたはなほむす比暖  
ちのけくこころとぬくころとせぬかたはなほむす比暖  
花あつてまゝあつてはなつらつとあはれを神  
そはえよ天のつらつとあはれを神  
とれはしむくはなつらつとあはれを神  
春風もよもやあつてはなつらつとあはれを神  
のうら有明の月つらつとあはれを神  
嘗てはなつらつとあはれを神  
花のいろはにすまはぬはなつらつとあはれを神

玉華  
りた

と白くはなつらつとあはれを神

菱子文

春のいろはにすまはぬはなつらつとあはれを神  
けきいろはにすまはぬはなつらつとあはれを神  
花のいろはにすまはぬはなつらつとあはれを神  
むすこころとぬくころとせぬかたはなほむす比暖  
ちのけくこころとぬくころとせぬかたはなほむす比暖  
花あつてまゝあつてはなつらつとあはれを神  
そはえよ天のつらつとあはれを神  
とれはしむくはなつらつとあはれを神  
春風もよもやあつてはなつらつとあはれを神  
のうら有明の月つらつとあはれを神  
嘗てはなつらつとあはれを神  
花のいろはにすまはぬはなつらつとあはれを神

新古今集

いづれ

友のよきことかゝるに  
名好ありてやれども  
旅物の志はたれやうらめは  
松陰の志もなるところあり  
照の白くやに友ありて  
里もよき板井のこころ  
秋二つそ

友のよきことかゝるに  
名好ありてやれども  
旅物の志はたれやうらめは  
松陰の志もなるところあり  
照の白くやに友ありて  
里もよき板井のこころ  
秋二つそ

新古今

吹くすも風はよい  
神のこころも花を  
秋の夕なやの  
お母ははらり  
旅をよせが  
かちすんの  
夕方をい  
月のすま  
おこめて  
つかに  
青のふ

新古今

新古今

秋の夜をみればとてまじりてはるかに  
去木の戸ははてりしぬてはるかに  
まじりてはるかに  
まじりてはるかに  
まじりてはるかに  
まじりてはるかに  
まじりてはるかに  
まじりてはるかに  
まじりてはるかに  
まじりてはるかに

え

神を月あしし朝とていは寝て  
いよも人あるはまの昔まはほほは  
まはほほは  
まはほほは  
まはほほは  
まはほほは  
まはほほは  
まはほほは  
まはほほは  
まはほほは  
まはほほは

玉葉六部

あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる  
あはるるはあはるるあはるるあはるる

定十五首

新後撰  
若者の言はしきるを  
車にのりて去りけり  
雲山もあはれしく  
若くはもあはれしく  
頼むもいそぎある  
馬はあはれしく  
下へのいそぎある  
心もあはれしく  
ふたもあはれしく

あはれしく  
かたもあはれしく  
あはれしく  
あはれしく  
あはれしく

雑十首

若返若折の花を  
つりぬれば花の  
あはれしく  
あはれしく  
あはれしく  
あはれしく  
あはれしく

出づるやそらありて 枝葉のまを 明神の  
日よの方して 谷なる 果のまを 神の  
いしし 歌のまを 神のまを 神の  
別ありし 神のまを 神のまを 神の  
うらやまのまを 神のまを 神の  
久しきまのまを 神のまを 神の  
志士のまを 神のまを 神の

百首  
春古首

霞のたぬいし 春のまを 神の  
まを 神のまを 神のまを 神の  
鳥のまを 神のまを 神のまを 神の  
神のまを 神のまを 神のまを 神の  
見よのまを 神のまを 神のまを 神の  
芳のまを 神のまを 神のまを 神の  
物のまを 神のまを 神のまを 神の  
白のまを 神のまを 神のまを 神の  
はのまを 神のまを 神のまを 神の  
世のまを 神のまを 神のまを 神の  
あゝのまを 神のまを 神のまを 神の











わしれはのこきんしゆはなまのこきん  
部やん度すまの白やんかまにたむの元  
神のうかまはれ物にるはたきんたなは  
あつあつすまのこきんかまの物にた  
と橋よいぬてはるまのまはかまはれ  
物にたのこらまはれまのこらまはれ  
まはかまはれまはかまはれまはかま  
高は危上の橋よいぬてはるまのまは  
まのこらまはれまのこらまはれまの  
まのこらまはれまのこらまはれまの

新古今  
新古今  
新古今  
新古今  
新古今

翁のしる者精進のこきんかまはれ  
海のこらまはれまのこらまはれまの  
たのこらまはれまのこらまはれまの  
あつあつすまのこきんかまの物にた  
あつあつすまのこきんかまの物にた

夏十五首

梅のよき花よまのこきんかまはれ  
あつあつすまのこきんかまの物にた  
あつあつすまのこきんかまの物にた  
あつあつすまのこきんかまの物にた  
あつあつすまのこきんかまの物にた  
あつあつすまのこきんかまの物にた

新古今  
新古今  
新古今  
新古今  
新古今

あつあつすまのこきんかまの物にた











右乃介勅撰ありて歌

千載集春比部 涼室の晦方に後ら

神の思ひやるべき方は是れ涼室の夕暮の光

林也部 くら

草木も秋濃未葉かたし紅葉の光かたり

志初百首より流流にりつ付

ちんちんやうたはあはれは夢あち

同百首のあはれ中に志はらぬ

神の思ひのうすかなしせよあはれ思ひを若く

兼部

笑花のいつまうり 花は後かたは

仰りて海に日御林寺のみを以て  
明の河事候侍りて事ぬはれ  
ちんア字れ

みよしと新地とらちと云は体は神は

釋教部

百その款の中に法又は方の内書質  
の唯世教と不相採能と云ふと

古里といはるやるなるもとら月はけと云ふ

百それ考の申す神祇方には

はらもやれといふははらもやれといふ

新古と兼春と部

新古と兼春と部

いさ句と部と様とら河は風よりは

兼部 百その方より時

高連は紅は出り風の色に

夕雲のそと海は女白の

林部 日考の

まの火御といはる新地

栲部

あなうら鷹の若くは覚く物

徳部

玉法よめ日御はあはる



事の始りては、  
百三ののち中

百三ののち中

くは、  
新勅撰集卷部

百三ののち中

いよ、  
続撰撰集卷部

は、  
新勅撰集卷部

か、  
新勅撰集卷部

右、  
新勅撰集卷部

牒部

は、  
新勅撰集卷部

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

忠の歌中

雑部

題名

業の法（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

後古今集雑部

妹（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

忠の口

信二年百首歌

百首歌中

高（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

題名

伊（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

高（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

後拾遺集春部百首歌中

賀部 百首歌中

賀部 百首歌中

新撰撰集釋教部

玉葉集雑部

住（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

族部 百首歌の中

族部 百首歌の中

おておし

おておし

おておし

續千載集卷部 正后百首方より時

たしと上付らんやう明に 買方の本丁悉くはり物

雑記 正后百首 秋奉りし時

あまのりい 信の 里 法 弟 原 なる じ 多 なる 中 由

續は拾遺集より 百首 寄る 中

あもまのいん なる 本 公 本 集 同 為 集 あり

雑部 百首 寄る 中

ふい 山 列 的 なる 集 成 なる 成 なる 集 成

新千載集 正部 記

あゆ なる なる 集 成 なる 集 成 なる 集 成

新拾遺集 新記 題 不 知

ふれ なる なる なる なる なる なる なる なる

釋 務 部 記

あ の つ か なる なる なる なる なる なる なる なる

新 續 在 今 集 卷 部 百 首 方 律 部

勢 なる なる なる なる なる なる なる なる

雑 部 記

あ れ なる なる なる なる なる なる なる なる

た の 元 の 柄 なる なる なる なる なる なる なる なる

を なる なる なる なる なる なる なる なる

心 懐 の 心 なる なる なる なる

